

〔研究ノート〕

病気イベントにおける、 「社会の縮図」の表現と「ゆるさ」によるつながり： 当事者と非当事者の共同と接続の観点から

杉本 洋(新潟医療福祉大学看護学部看護学科)

抄録

本研究で、病気イベントの実践、特に姉さん&ゆるキャラシスターズというユニットの活動を通して、当事者－非当事者の関係性について考察した。その結果、①イベントを通して人々の共同や接続のみではなく、社会的規範等に対して作用するつながりのありようが見出され、②イベントのような病気や生きづらさとは異なる外部のアクターを設定することによって、支援者－被支援者とは異なる自然発生的な当事者－非当事者関係性が形成されることが考えられた。そして、③当事者－非当事者を包摂する形の共感がつながりの中で生じる可能性が示された。これらは、従来断絶しがちであった当事者－非当事者のつながりをつくる新たな手掛かりになりうると共に、メンタルヘルスにかかわる新たな保健施策のありようの提言につながるものである。今後は、生じる共感がいかなるものかという観点についての実証的、理論的検討が求められる。

Key word

病気イベント、表現、ゆるさ、社会の縮図

1. 諸言

本稿では、メンタルヘルス関連の当事者活動において、いかにして当事者－非当事者の関係性が構築されるのかを考察する。その際は、いかにして当事者－非当事者とが共同できるのか、といった観点と、共同とはいわなくとも接点ができるのか、といった接続の観点を考察する。

近年メンタルヘルスの問題は、うつ病や職場のストレスなど多岐にわたり、一部の特殊な人の問題ではなくなりつつある。自閉症が連続的なスペクトラム概念でとらえられるように、当事者－非当事者の境は曖昧になりつつある。従来メンタルヘルスの問題は、様々な観点から語られてきた。単に生物医学的側面のみならず、社会的偏見や孤立といった社会・心理的問題も重要な課題であり、当事者はセルフヘルプ・グループの実践などを通して、当事者性を重視し、回復に向けての新たな価値観を創造してきた[久保 2004; 平野 1995]。しかしながら、セルフヘルプ・グループ研究においては、専門家との関係性など語られる点はあったものの[久保 2004]、当事者内部の実践に対するものが主流であった。

当事者－非当事者の境が曖昧な中、支援者－被支援者といった関係性に帰結されない活動のありようを検討することは、断絶されがちな当事者－非当事者の関係構築に向けて、また当事者、非当事者が混在する中での社会的問題の解消に向けて新たな可能性の探索につながるものである。

2. 研究フィールド

本研究のフィールドとなるのは、主に新潟で活動しているメンタルヘルス関連の生きづらさを有する人々による表現活動である。いくつかの活動、団体があるが、その中でも主としてK-BOXという心の病やひきこもりなどを抱える人々による団体に所属する「姉さん&ゆるキャラシスターズ」というバラドル(バラエティーアイドル)グループ(略して姉ゆる)に今回は焦点をあてる。

姉ゆるの詳細は後述するとして、ここでは姉ゆるの理解する上で必要となる、姉ゆるが所属するK-BOXについて述べる。K-BOXは代表のKaccoさんが自身の摂食障害やひきこもりなどの経験および、表現(Kaccoさんの場合、イラストなど)により救われた経験を元に、心の病を抱える当事者が表現できる場を作りたいと願う中、10年ほど前に始めた活動である。芸能プロダクションという位置づけであり、歌やトークなどのパフォーマンス、小物の制作などを行う表現者が約20名ほど所属する。毎週のレッスンと、2か月に一度の定期的なライブが主な活動となっている。また、地域での祭りなどのイベントにも出向き、場を盛り上げるのに一役買っている。表現に長けた人はもちろん、そうではない人も歓迎しており、レッスン生という立場でK-BOXの活動にかかわり、ライブでのデビューに向けて活動する人もいる。

ライブに来る観客には常連の観客もいれば、新規の観客もいる。メンタルヘルス系の当事者の方も多く見受けられるが、K-BOXを支援する人たちなど必ずしも当事者の立場ではない人も参加する。

3. 姉さん&ゆるキャラシスターズの概要－メンバーと活動

3-1. メンバー

姉さん&ゆるキャラシスターズはK-BOXに所属するバラドルである。女性3人組で¹⁾、ユーモアを交えた歌や踊り、トークといったパフォーマンスを展開している。メンバーは健常者の立場の「姉さん」、うつ病の当事者である「穂乃歌」さん、子どもが発達障害という親の立場である「ちゃう」さんの3人となっている。もともと姉さんは、長年スタッフとしてK-BOXにかかわっており、メンバーの衣装やメイクなどを担当し、メンバーから姉さんと慕われていた。ちゃうさんもまたスタッフとしてK-BOXにかかわってきた。穂乃歌さんは、自殺予防にかかわる団体を紹介している冊子を見、Kaccoさんも副代表としてかかわる「こわれ者の祭典」というメンタルヘルスイベントに参加したことが縁で、K-BOXに所属するようになった。

3-2. 活動

姉ゆるの発端は、あるK-BOXのイベントとなる。K-BOXは近年、新春イベントという形で、年明けの1月に普段のライブとは異なるK-BOXの姿を楽しんでもらうイベントを行っている。新春イベントでは、K-BOXが大家族という位置づけで、表現者もスタッフも一同に集まる。そしていつものパフォーマンスとは異なり、様々なゲームの紅白戦を行ったり、かくし芸を披露したりする取り組みとなっている。

この新春イベントはいつもと異なるK-BOXの姿をみてもらうというスタンスから、表現者だけではなく、スタッフも含めてパフォーマンスする機会ともなっている。姉ゆるはその取り組みの一環

として2016年1月の新春イベントでパフォーマンスを行った。そもそもが余興的な取り組みであり、新春イベントとして気心知れたメンバーやお客さんの中でのパフォーマンスとして行われたものであった。しかしながらその後も継続して活動が行われるようになり、K-BOXで活動するmotchyさんが、楽曲を提供するなどプロデュースを行い、7月10日にデビューとなった。そして、その後はK-BOXのライブや地域のイベント、教育機関でのイベントなどでパフォーマンスを行っている。

姉ゆるをめぐっては、K-BOXの代表のKaccoさん、プロデュースをするmotchyさんをはじめ、様々な人がかかわっている。K-BOXでも「親衛隊」が結成され、アイドルグループとしての姉ゆるのパフォーマンスを盛り

上げる。親衛隊は、K-BOXのメンバーを含んでおり、普段はアート活動や司会、スタッフとしての活動を行っている。姉ゆるのTシャツやバッジなどの応援グッズが作られ、そのデザインもアート部門のメンバーが担当している。逆に姉ゆるのメンバーも姉ゆるの立場を離れると、普段はスタッフとしてK-BOXのイベントやメンバーを支える立場として活動する。

このように、姉ゆるの活動はKaccoさんの、代表としての各種営業活動やmotchyさんのプロデュース、親衛隊などK-BOXの総力を挙げて展開される活動となっている。



写真1 姉ゆるのパフォーマンスの様子
(2017年7月13日)

4.「社会の縮図」と「ゆるさ」－姉ゆるのコンセプト

姉ゆるにはコンセプトが設定されている。そのひとつには「社会の縮図」であるということが挙げられる。それは、「健常者」の立場の姉さんと、「当事者」の立場の穂乃歌さん、当事者の「家族」という立場のちゃうさん、というように、それぞれの立場の人が共に活動するという形になっていることに表れている。Kaccoさんは以下のようにいう。

(姉ゆるを)世の中の縮図だと思って組んだんです。うつ病もいれば、健常者もいろいろいる。みんなそれぞれの立場の人間が手を取り合う。けど助けなきゃというのはわかるんだけど、手を出せるのは半分くらいなのではないかと思うんですね。手を取り合ったらこんなことができたというメッセージを発信していきたいんですね。今まではひきこもりなどの人のみで発信してきたんですけど。
(2017年7月イベント時)

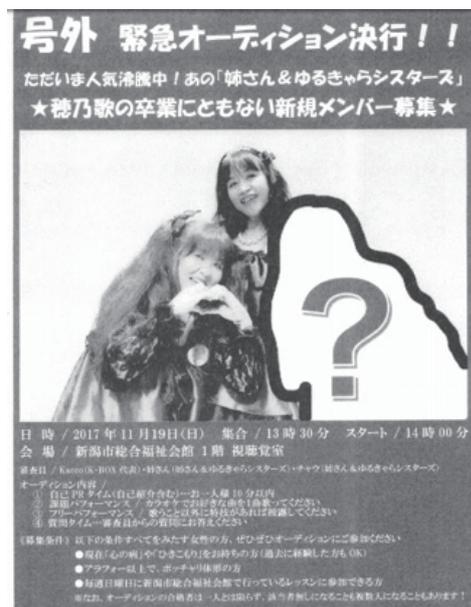
今まで、当事者のみで活動を行ってきたが、その重要性と共に、新たに世の中の縮図としての表現を行うというコンセプトのもと姉ゆるは生み出されている。社会の縮図というコンセプトからは、当事者と非当事者が共に表現することで、手を取り合って何かができる、慣れていない人が慣れ、

手を差し伸べられるような風土を作る一助となる、といった当事者と非当事者が共同し、非当事者の当事者への心理的障壁を減らし、アクセスを容易にする可能性を広げることを志す活動となっていることがうかがえる。

また、「手を取り合ったらこんなことできる、「共感だけではなくて変われるんだ、という姿を見せたい(2017年4月)」という立場が示されたり、「うつに健常者が助けられたり(2017年7月)」といった相互に助けられる体験が紹介されることもある。「社会の縮図」としての活動からは、当事者と非当事者が混じり合う中での活動の可能性や、支援の双方向性の存在が広く示される。

なお、社会の縮図というコンセプトに基づき、Kaccoさんは、将来的には「支援者」も入れたいという構想を持っているとのことであった(2017年9月イベント時)。これは、穂乃歌さんが、仕事の都合から姉ゆるの活動を辞めることがイベントで報告され(2017年8月)、穂乃歌さんに代わるメンバーのオーディションを行うことになったのだが、その案内をするときに語られたことである。穂乃歌さんの代わりということではゆるの当事者を募集しているが、将来は、医療や福祉などの支援者の立場も加えた構成となり、「社会の縮図」としての活動の広がりが期待されている。

「社会の縮図」に加えて、姉ゆるのもうひとつのコンセプトは「ゆるさ」となる。それは、姉さん&ゆるキャラシスターズというユニット名にも表れており、新規メンバーを募るオーディションのフライヤーでも「アラフォー以上で、ポッチャリ体形の方」との記載があることにも表れているように思われる。姉ゆるのパフォーマンス時には、「ゆる〜くいっちゃうよ〜」と投げかけ、「いっちゃって〜」と親衛隊が応える場面がある。ステージ上で音響トラブルがあった時も、「ゆるさ」でもって笑い飛ばしていた(2017年7月)。ゆるさは、「笑っちゃいけないような雰囲気もあったけど、自然と笑いが出て」くる状況をつくる(2017年7月Kaccoさん)。メンタルヘルス当事者のパフォーマンスということで、深刻な雰囲気が漂いがちなところもあるが、バラドルという形態をとる「ゆるさ」をコンセプトとしたパフォーマンスは、イベントを支配する規範に風穴を開けることに一役買っている。



のものといえる。姉ゆるを楽しみに見にくるパフォーマーにおいても健常者、当事者の双方がおり、観客を通して当事者、非当事者をつなぐ作用もまた、他のパフォーマーと同様に有していることが考えられた。

また、姉ゆるのパフォーマンスは当事者－非当事者間の壁を崩すよう働きかけることがある。たとえば、姉ゆる自体はもちろん、姉ゆるのパフォーマンスを特徴づける親衛隊は、声も動作も大きく勢いがあり、たとえば福祉・教育的要素の強いイベントなどイベントによってはどよめきが生じることもあった(2017年7月など)。パフォーマンスという形態を通して、その場の空気を揺るがし、揺るがされた雰囲気の中で、病気の体験やメッセージが織り込まれる。こうした雰囲気が醸成される中で、「笑ってはいけない」といった規範も同時に揺るがされ、非当事者の当事者への心理的アクセスも容易になることが考えられる。

同様に、姉ゆるのコンセプトの「ゆるさ」も当事者－非当事者間の壁に働きかける要素を持つように思われる。「ゆるさ」があり、ユーモアや笑いが盛り込まれることで、病気の話が聞きやすい雰囲気となることが想像される。深刻な体験談は「笑ってはいけない」といった規範がある中ではアクセスしにくい状況があるが、「ゆるさ」が含まれることでアクセスしやすくなる側面があることが考えられる。体験やメッセージとしての話としてはたとえば、姉さんが健常者の立場としてスタッフとして長年K-BOXにかかわってきた身として、「お医者さんとか薬とかはもちろんそれはそれで大事でそれはそれでしっかり治してもらって、それとは別にいろんなところに足を運んで、あったところにたどりつけば薄皮を剥ぐようになっていくのがわかる」という感想、メッセージを発したり、ちゅうさんは、発達障害をもつ子どもが保育園時代に「わがままじゃないの?」っていわれ、悲しい思いをしたとの経験を語り、穂乃歌さんは時に涙ぐみながら、うつ体験を語る(2017年7月)。病気の体験などは同じように苦しむ人たちに共感をもって受け入れられることも多いかと思われる。しかしながら非当事者にとっては重い話であり戸惑ったり、当事者でなくてもここにいていいのか、といった罪悪感のような感覚も生じるかもしれない。しかしながら、姉さんのような健常者の立場でメッセージを発し、共に活動している姿を見せたり、「ゆるさ」があることで非当事者にも響くメッセージとなりうるように感じられる。「笑い」の文脈は、広く受け入れられる一方、経験が軽視されるという側面も指摘されるが(稲沢 2006)、一方では、深い深刻さを伴う問題に対しても軽視されるというわけではなくアクセスしやすくなること、そこに「ゆるさ」が関連することが本稿における主張のひとつである。そこにはさらに、パフォーマンスという場であることで経験を発する側も発しやすくなるという側面、発する側、受ける側の相互作用も生じてくる可能性が考えられる。

姉ゆるは、社会の縮図としてのゆるさを含めたパフォーマンスをすることで、当事者－非当事者が混在するイベント・パフォーマンスを構成することによって、または当事者－非当事者間の心理的壁に働きかけることによって当事者－非当事者をつないでいることが考えられる。

6. 表現活動がつなぐ、当事者－非当事者

さて、姉ゆるの実践を元に、当事者－非当事者の共同や社会や規範に働きかける様を示してきた。次いで、筆者が研究フィールドとしている複数の表現活動にみられるエピソードを交えて考察を深めていきたい。

姉ゆるのパフォーマンスは、親衛隊の活動などとあいまって迫真性を伴うもので、それは他の病気イベントに通じるものがある。特にこわれ者の祭典というイベントにおいて自作詩を朗読する月乃さんは絶叫朗読という形で、勢いのあるパフォーマンスを行うが、そのパフォーマンスは観客を驚かせ、イベントの場の雰囲気を変え、時に笑いを誘う。パフォーマンスに触れる当事者には自作詩の内容や、トークに伴う共感が生じるが、姉ゆるの実践も同様な特徴に加え、当事者－非当事者の壁を取り払う特徴を有しているように思われる。

姉ゆるは、Kaccoさんの「(困っている障害者がいて助けたいと思っても)実際に手を出せるのは半分くらい」との認識のもと、当事者－非当事者の共同・接続のあり方を広めようとしている。こうした認識に類似した認識は他の表現活動にも見受けられる。こわれ者の祭典、カウンター達の朗読会、といったイベントで活動するアイコさんは2017年に著書を出版した(成宮2017)。そこで、活動について賛否両論あり、批判を受けることもあるが、まずは「まな板にのる」ことを目指していることを記しており、注目され、議論の俎上に載せることのメンタルヘルスや生きづらさ業界にとっての重要性が示される。また、こわれ者の祭典のきっかけとなり、現在もこわれ者の祭典の新潟公演にて司会を務める新潟のお笑い集団NAMARA代表の江口さんも著書にて、「障害は笑ってもいい」というスタンスをとっていることを記している。そしてここでは、面白いのは興味があり、それは知ることにつながる、そして免疫のない状態から慣れることにつながるのと立場をとっている(江口2011)。姉ゆるの所属するK-BOXのKaccoさんはこわれ者の祭典の副代表であり、アイコさんや江口さんとのつながりも深い。それぞれの活動、団体は異なれども、それぞれが活動を進めることで、何らかの共通した当事者－非当事者をつなぐ文化が醸成されているように見受けられる。

社会の縮図として様々な立場の人が共同するあり方は、こわれ者の祭典代表の月乃さんのいう、様々な疾患や生きづらさを抱える人たちの「仲間」、アイコさんのいう、診断名とか服薬の有無とかに限らない「生きづらさ」(成宮2017)、という観点に連なるものであるように思われる。月乃さんは、「心の底からジワジワとわき上がってくる感情こそが共感であり、共感による絆こそが『仲間』(月乃2017)」と表す。当事者－非当事者の共同は、立場の異なる人が共に行う実践であり、それにより接続されるものは、当事者－非当事者のつながりであるのだが、異なる立場の者同士をつながりという意味合いのみならず、多様性が渦巻く中での共感による、当事者－非当事者が曖昧な状況下におけるつながりを含むものではないかと、こうした活動からは考えられる。

7. 当事者－非当事者の共同と接続

今回姉ゆるの活動を主に取り上げ、当事者－非当事者が混在するユニットが組まれ、活動する姿を描いてきた。そして表現を通して当事者－非当事者が共同・接続するありようを他の表現活動の実践を含め考察した。

当事者と非当事者の共同は様々な形をとってなされる。病気イベントは、当事者の表現者、当事者－非当事者を含む観客、スタッフ、活動を支援する人々など様々なアクターによって構成される。ここでは、これらのアクターの多様性を踏まえ、表現を通して見いだされる、当事者－非当事者が共に行う共同と、つながりをつくる接続、そこから考えられる当事者－非当事者の関係性について整理したい。

姉ゆるのように「社会の縮図」としてのコンセプトを持つ当事者－非当事者の共同は、支援者－被支援者といった形とは異なる当事者－非当事者の共同のあり方を示している。そして、パフォーマンスとして対外的に示されることによって、当事者を中心とした(ユニットにみられる)世界は、非当事者を中心としながら当事者も混在する社会へ、当事者－非当事者が重なり合わされつつ接続される様相が見て取れる。

ひとつの接続のあり方としては、たとえば当事者の表現者と観客の非当事者との接続といった形が想定される。しかしながら接続は単に当事者、非当事者の関係性のみならず、社会に対しての接続、特に社会的な規範や固定観念に対しての作用を有することが考えられた。心の病やひきこもりの経験を有する人々がステージ上でパフォーマンスを行うことはインパクトがあることであり、それ自体がひとつ表現としての社会に作用する。しかしながら単に表現するのみならず、姉ゆるのようなユーモアと勢いのある活動を展開することによって、健常者を含む社会の規範に働きかける要素があることを考察してきた。ユーモアは緊張緩和等の作用と共に、タブーへの言及を可能にする作用を持つ(柏木 2017)。病気などの深刻な話を聞く場において、ユーモアや明るさと勢いを有するイベント・パフォーマンスは、不謹慎だと非難されることもある一方で、非当事者と当事者間の風通しをよくする。先述の通り、笑いが語りを軽視するという否定的な側面も指摘されているが(稲沢 2006)、ユーモアや勢いは経験の軽視とは異なる形での、当事者、非当事者双方にとって経験へのアクセスを促す側面があることが考えられた。

病気イベントにみる当事者－非当事者の関係性において興味深い点は、関係性が支援－被支援という中で計画的・意図的に形成されているわけではなく、イベントを構成するアクターの多様性から自然発生的に、イベントという場に付随して生じる関係性であるということである。

すなわち病気イベントを通してつくられる関係性は、支援－被支援という関係ではなく、何かを創る、表現すること／もの、を設定し、そのプロセスで作られる関係性と考えられる。笑いに関してはパフォーマーのみではなくオーディエンスにおいてもある種の振る舞いが求められるが(埜 2018)、そうした特有の振る舞いを含めたパフォーマンスの場でこそそのつながり方がある。

メンタルヘルスにかかわる健康施策を考える上で、保健医療セクター以外の部門の参画が古くから求められているが(Hancock 1987)、関係性を創るためのイベントという観点と共に、イベントが先行しながら必然的に関係性が生成するという観点を見据えることにより、従来の保健施策の網にかからず、孤立しがちな人たちの参画を促せる可能性があると考えられる。

そして、本研究は病気イベントをテーマとしたものであるが、広く考えると関係形成の肝となる、病気や生きづらさの外部にある「こと／もの」は必ずしもイベントというわけではなく、多くのこと／ものが可能性としては想定される。病気イベントが示す当事者－非当事者の共同は病気や生きづらさの、問題からのアプローチではなく、結果として問題解決に導く外部アクターの重要性を示しているように思われる。

本稿では、当事者－非当事者のつながりという観点で考察を進めてきたが、当事者－非当事者の連続性、包摂を再考する視点を表現活動は示している。表現活動はメンタルヘルスにかかわる活動であり、心の病やひきこもりなどの経験を有している人々の活動である。病気イベントは、当事者－非当事者という括りを存在させつつも解体される多様性に満ちた場でもある。筆者はこうした多様性に着眼しながら、共感とは異なる個々の差異に着眼した関係性の作られ方を考察してきた(杉本 2013)。そして、個々の差異や多様性に満ちたつながり、分かり合えなさがある中であっても、共感活動の根底にある感覚であることは病気イベントにより示されている(月乃 2017など)。

これらから、病気イベントを通して最終的に共創されるのは、作品でもパフォーマンスであると同時に、多様な人がいる中でのつながり、多様性の中にある共感、といったものであるように思われる。そうした感覚は共感と呼べるものであるのか、また呼べるとしたらそうした共感とはどのようなものなのか、今後探っていきたいと考える。

8. 結論

本研究では、病気イベントの実践、特に姉さん&ゆるキャラシスターズというユニットの活動を通して、当事者－非当事者の関係性について考察した。

その結果、①イベントを通して人々の共同や接続のみではなく、社会的規範等に対して作用するつながりのありようが見出され、②イベントのような病気や生きづらさとは異なる外部のアクターを設定することによって、支援者－被支援者とは異なる自然発生的な当事者－非当事者関係性が形成されることが考えられた。そして、③当事者－非当事者を包摂する形の共感がつながりの中で生じる可能性が示された。

これらは、従来断絶しがちであった当事者－非当事者のつながりをつくる新たな手掛かりになりうると共に、メンタルヘルスにかかわる新たな保健施策のありようの提言につながるものである。今後は、イベントにて生じる共感がいかなるものかという観点についての実証的、理論的検討が求められる。

謝辞

本研究にかかわっていただきました姉ゆるはじめ表現者および関係者の方々に感謝いたします。また、本研究は2018年度新潟医療福祉大学・研究奨励金<人文社会関連分野研究費>の助成を受けて行われました。本研究は第1回共創学会の口頭発表内容を元に構成したものです。発表の際には貴重なご意見をいただきました。感謝いたします。

注

- 1) 本稿は3名で構成されていた際の状況の記述が主となるが、現在は、穂乃歌さんが脱退した後、オーディションが行われ、2期のメンバーとして、あいちゃんさんとHASHIGOさんの2名がメンバーとなり、現在活動が行われている。

参考文献

- 埴幸枝, 2018, 『障害者と笑い: 障害をめぐるコミュニケーションを拓く』新曜社.
- 江口歩, 2011, 『エグチズム: 新潟お笑い疾風録 NAMARAの素』新潟日報事業社.
- Hancock, T., 1987, "Lalonde and beyond: Looking back at "A New Perspective on the Health of Canadians," Health Promotion. 1(1), pp.93-100.
- 平野かよ子, 1995, 『セルフ・ヘルプグループによる回復: アルコール依存症を例として』川島書店.
- 稲沢公一, 2006, 「物語としての精神障害: 本人の語りを中心に」田垣正晋編著『障害・病いと「ふつう」のはざままで: 軽度障害者 どっちつかずのジレンマを語る』明石書店. pp.98-125.
- 柏木哲夫, 2017, 「ユーモアの働き 1」『作業療法ジャーナル』51(11), pp.1120-1121.
- 久保紘章, 2004, 『セルフヘルプ・グループ—当事者へのまなざし』相川書房.
- 成宮アイコ, 2017, 『あなたとわたしのドキュメンタリー: 死ぬな、終わらせるな、死ぬな』書肆侃侃房.
- 杉本洋, 2013, 「『生きづらさ』をパフォーマンスする人々のつながりを形成する戦略: 共通性による共感と障害の価値転換を越えて」『アートミーツケア』5, pp.21-36.
- 月乃光司, 2017, 「元廃人サバイバーマン」斎藤環・井原裕監修『メンタル系サバイバルシリーズ 私はこうしてサバイバルした』日本評論社. pp.2-11.